

詩 追憶のカイロ

以下の詩は、とよださなえさんが、NHK 記者だったご主人とともにエジプト、カイロで暮らした三年半の間に書きとめた詩をまとめた詩集『こどものピラミッド』（2019年8月出版）から、作者の承諾を得て紹介するものです。とよださんがカイロで暮らしたのは、今から50年近くも前のことになりますが、その頃のカイロには、第4次中東戦争（1973年）後のざわざわした雰囲気と同時に、フランスやイギリス支配時代のヨーロッパ文化の名残を感じさせる、いわゆるスノビズムの面影がありました。とよださんは、エジプト人のメイドと運転手たちに助けられて幼い子供たちを育てながら、近隣で紛争や内乱があれば、何があっても飛び出していくジャーナリストの鑑のような夫君の帰宅を、待ち続ける日々を過ごしていました。

そのような暮らしの中から紡ぎ出された「ことば」の数々は、50年の時空を超えて、今日でも私たちの心を動かします。今、改めて「とよださんのカイロ」から、人の気持ちの変わらない優しさを読み取ることで、この分断した世界をつなぐ何か暖かいものを感じることが出来るかもしれません。

今後、1篇ずつ、ご紹介します。

砂嵐・春

とよださなえ

エア・シューターの中の
支払伝票のように
私は地球儀の上を飛んだ
意思のないまま 移動する物体

対岸の見えない河
ひたすら平らな
パンパ
黒いビロードのジャングル
放り出された時
目も見えず 呼吸すら困難だった

何も見えない一寸先が見えない

自身をも見えなくする霧には
覚えがあった
しっとり咽頭をうるおす
やさしさがあった

これは違う
身体中の水分が吸い取られるような
緊張がある
緊張するとは ということなのか

カイロの春です ハムシーンです
砂嵐のことですよ
全身を無遠慮に打つ
サハラからの砂の音を聞いた

皮膚の隅々まで
入り込んでくる粒子
ほかに
顔だけ打つ異物があった
羽音と冷たさで
蠅の群れと知った
砂と蠅

砂は無差別 蠅は
私の目と鼻と口の
水を求めて
攻撃をかけてきた

ハムシーンの身の引き方は
みごとだった
砂は気配を消し
瑠璃色の空に 研ぎ澄ました剣の
新月と冷気を残して 去った
何が見えなくなっていた時間なのか
ハムシーンそのものが大スペクトルでなく
何かの幕間であったとしたら

古くから知っている春のにおい
春の肌ざわりを探して歩いた
砂埃に覆われて 生まれてくる新芽を
春と呼ぶのか

子供たちがついてくる
木綿のガラバーヤ（長衣）のすそを
風が吹き抜け 裸足の足がひび割れている
はやし声はあっても 笑いのない目で
ついてくる
私の手に 毛糸のカーディガンがあった

子供たちの執拗な目が気にならなくなった
時
カイロの春をみた

